

チーム志向越境型アントレプレナー育成プログラム

(実施期間：平成 26～28 年度)

実施機関：東京工業大学（総括責任者：飯島 淳一）

採択プログラムの概要

本取組は、様々なステークホルダーとの間の自律的な協力関係を保ちながら、専門の違い、文化の違い、性別の違いなどの境界を乗り越え、多様な価値観を許容し、互いに協力しながらチームとして活動することにより、イノベーションを起こすことのできる人材を育成することを目指している。

また、大学院修士課程学生をターゲットとした人材育成のみならず、K12（幼稚園から小中高教育まで）に対する21世紀スキル教育、プログラムへの導入となる起業体験イベントの実施、およびプログラムの出口としての海外派遣、起業後のアクセレレーション、そしてEXITまでの全体をカバーする、イノベーション・エコシステムの構築を特徴としている。

教育プログラムは、「デザイン思考にもとづくもの・ことづくり」ピラー、「アントレプレナー育成に焦点を当てたMBA関連科目」ピラー、およびビジネスプランの書き方から、メンターによる起業指導までを含む「アントレプレナーシップ論」ピラー、の3つの大きな柱からなっている。

(1) 評価結果

総合評価	目標達成度	成果	計画・手法の妥当性	補助事業期間終了後における取組の継続性・発展性
A	a	a	a	a

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

(2) 評価コメント

チーム志向越境型アントレプレナー育成プログラム（CBEC）は工学系単科大学の特徴を自らよく理解し、「研究開発成果の活用」に加えて、デザイン思考の取組強化の手段として芸術系大学との連携を積極的に進めた点が特徴となっている。3つの柱からなる教育カリキュラムを実施し、受講生数など所期の目標を概ね達成しており、終了時までにはエンジニアリングデザインコースやテクノアントレプレナーコースの設定等、今後の自走型の教育体制を学内に構築したことは評価できる。学内受講生の大半が修士課程学生であったので、今後は博士・ポスドクへのアプローチを強化し、より先の出口目標の設定をすることでベンチャー創業等の成果を期待する。

・**目標達成度**：受講者数、コンペティション参加数、優秀チームの海外派遣等について、所期の目標に達している。芸術系大学の学生の参画に特色があり、延べ受講者数は 819 名であり評価で

きる。今後は、ビジネスに関する知識や経験が少ない学生や若手研究者の人材育成の観点で、企業等に所属する社会人の割合を高めることが期待される。

・**成果**：デザイン思考に基づく「もの・ことづくり」を始めとする3本柱のカリキュラムを編成し教育を実施しており、場としてのデザイン工房を整備し、さらに芸術系大学との連携を推進することでデザイン思考への取組を定着、継続させていることは評価できる。イノベーション・エコシステム形成についても地元の中小企業を含む民間企業や外部機関と連携し、学生の起業への関心の喚起、越境型の連携に効果を上げており、研究開発成果を基にしたベンチャーの起業まで達している点は評価できる。今後は、コンペイベントでの受賞やさらなるベンチャー設立等を期待する。

・**計画・手法の妥当性**：本事業を運営するための諸活動を CBEC 運営会議の定期開催、学内外アドバイザーボード設置などで多角的な意見聴取を行い、プログラムの円滑な実現を図ったことは評価できる。EDGE 採択校の広島大学が開発した自己判定ツールを導入して受講生のプログラム終了時の変化を把握し、改善を試みている。デザイン思考の実践に関するノウハウ、ツールを EDGE 採択校以外の大学へも広く共有したことも評価できる。

・**補助事業期間終了後における取組の継続性・発展性**：大学経営層の意識改革を促し、東工大基金よるスタートアップ支援金制度を発足させたことや、ニーズ志向アプローチの重要性の認識により未来産業創出に向けた産学連携推進本部の再組織化を促進した点は評価できる。平成 28 年度以降、3 研究科の横断的組織であるエンジニアリングデザインコースが事業継続の主体を担っている。大学院カリキュラムの定着と社会人アカデミーに「テクノアントレプレナーコース」を設置し受講料収入から実施費用を確保することで、補助事業期間終了後における取組の継続性・発展性が確保されており評価できる。